

美術部へようこそ! 長野県軽井沢高等学校

地元の特徴を生かした作品づくりに取り組み、地域との交流を大切にしている美術部取材しました。

ロゴやエプロンをデザイン

赤い生地に白い文字で「カルビ」と記された、おそろいのエプロン。「学年が上がるにつれて、汚れて文字が読めなくなるんです」と、前顧問の齊藤篤史先生(※)は笑う。

軽井沢高等学校美術部、略して「カルビ」。このロゴマークやエプロンは、部員たちがデザインしたもの。こういった部のブランディングが、校内外での多岐にわたる活動に役立っているという。

「カルビ」は2013年、部員ゼロのところから始動した。その年に同校に赴任した齊藤先生が声かけをして部員を集め、現在まで、型にはまらない活動を展開してきた。個人制作にとどまらず、チームでの活動も幅広く行う。地域の美術館や幼稚園でワークショップを開催したり、「クラブ新聞」を作ったり――。

小所帯でも多彩な活動

なかでも、特徴的なものの一つが、演劇とダンスを融合した身体によるアート表現「パフォーマンス」。これまで、自主展覧会や文化祭などで披露してきた。小道具や音楽、衣装は全て部員が手づくりする。中学生のときにこのパフォーマンスを見たことがあるという部員は、「そのときのインパクトがずっと忘れられず、カルビに入りたいと思うようになりました」と振り返る。

部員数はいつも10名未満。2019年3月時点で、部員数は3名だ。それでも、小所帯ながら常に新しいことに挑戦し、地域に向けて積極的に発信してきた。

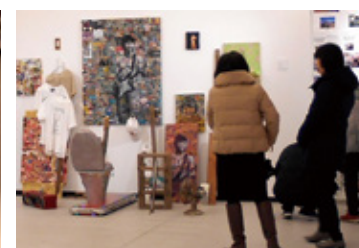
2017年には、JR軽井沢駅からの依頼を受け、北陸新幹線(長野―東京間)開業20周年のCM・ポスター制作に参加。最近では、2019年6月に軽井沢町で開かれた環境関係のG20閣僚会合に向けた地元限定ロゴマークを制作した。活動の根底には、「一人で絵を描くだけが美術ではない」という齊藤先生の思いがある。

美術で変わる、成長する

毎年3月には、1年間の集大成として、学校近くの軽井沢千住博美術館で自主展覧会を開催している。準備に半年かけ、会場設営やちらし・ポスターづくりなども部員たちが行う。回を重ねるごとに知名度も向上し、会期中は多くの来場者が訪れる。

濃密な時間を「カルビ」で過ごすことで、生徒たちは新たな自分を発見し、成長していくという。表現活動をさらに深めたいと、美術大学への進学を決めた部員も少なくない。「内面を解放し、外に開くことで、つくることの喜びを知ってもらいたい」と齊藤先生。この春、美術大学へ進む3年生は「カルビは人生を変えてくれた場所」と笑顔で語った。

※2019年4月から
長野県上田染谷丘高等学校に勤務。



上／赤いエプロンを身につけた3名の部員。学年を超えて仲がよく、いつも笑い声が絶えない。
左／2017年に軽井沢千住博美術館で披露されたパフォーマンス。
右／2019年3・4月に軽井沢千住博美術館で開かれた自主展覧会『「ほぼカルビ」展』。

教室を飛びだして

アーカスプロジェクト(茨城県守谷市)

国籍や世代を超え、アーティストと地域住民がつながる、茨城県守谷市の「アーカスプロジェクト」をご紹介します。



守谷市の旧小学校校舎を拠点にした「アーカスプロジェクト」は、1994年に始まった。県や守谷市などで行く実行委員会が運営するプロジェクトの基盤は、国際的に活躍するアーティストを一定期間招き、創作を支援する「アーティスト・イン・レジデンス」だ。

毎年夏から年末にかけての4か月間程度、現代芸術分野の若手アーティスト数名が滞在し、創作に励んでいる。これまで、33か国から100組以上が訪れた。

期間中には毎年、アーティストの制作現場を公開する「オープnstudio」を開催。小中学生向けのスタジオツアーもあり、参加者たちは、普段見ることのできない作品制作の裏側を、アーティスト本人との対話

をとおして知ることができる。

毎回、子どもたちはアーティストの話に興味津々といった様子。「どうしてこれが作品なの」「作品とは思えない」――。質問のコーナーでは、ときにドキドキするような言葉をアーティストにぶつけることもある。しかし、その純粋な感想が、アーティストにとって新しい発見につながることもあり、お互いにとってよい刺激になっているという。毎年参加する「常連」もあり、この体験をきっかけに、美術大学へ進学した住民もいる。

「世界のアーティストとの交流をとおして、さまざまな表現方法があることを知ってもらいたい」とプロジェクトマネージャーの石井瑞穂さん(いしいみずほ)は語る。アートとの出会いが、地域の潜在力を高めていく。



海外アーティストのオープnstudioの様子。中学生たちは熱心に耳を傾けている。

放課後

第15回

ART